

# 滝見の旅

伊藤左千夫

青空文庫



七月十五日は根岸庵の会日なり。十七日にいでたとんと長塚に約す。十六日夕より雨ふりいでて廿日はつかに至りて猶なおやまず。

長雨のふらくやまねば二荒の瀧見の旅を行きがてにすも

根岸庵よりされ歌来る。

藁ずきの紙にもあるか君が身は瀧見に行かず雨づゝみする

かえし

雨雲のおほひかくさば二荒山行きて見るとも多岐見えめやも  
此夕この長塚来りて、雨ふるとも明日は行かん、という。古袴など取り出でて十年昔の書生にいでたとんと支度ととのえなどす。廿にじゅう

一ういち日朝まだきに起き出でて見るに有明の月東の空に残りて雨は

なごりなく晴れたり。心地よき事いわん方なし。七時上野停車場  
に行けば長塚すで既すでにありて吾を待つ。汽車の窓に青田のながめ心ゆ  
くさまなり。利根の鉄橋を越えて行くに夏蕎麦そばをつくる畑かんぴよ  
瓢うをつくる畑などあれば

埼玉や古河のあたりの夏蕎麦のなつみこめやもおほに思はゞ  
麥わらをしける廣畑瓜の畑葉かげに瓜のこゝたく見ゆる

など口ずさむ。十二時日光に著つく。町を過ぎて含かんまん満まんの淵に行き  
石仏を見る。大日堂の裏手より裏見の滝へところざす。道のほ  
とりに咲く草花、あからむ覆いちご盆ご子ごなどさすがになつかしくて根岸  
庵のあるじがり端書はがきをやる。

少女等がかざしの玉の赤玉に似たるいちごを採りつゝありく

奥山の道のへに咲く草花をうらめづらしみ見せまくもとな

おぼつかなき歌なり。裏見の滝に著つく。茶店に人無し。外国の婦人のまだうら若きと見ゆるが靴の上に草鞋をはき、一人は橋の上に立ち、一人は岩に腰うちかけて絵など写すめり。斯かる深山に入りてみやびたるわざまでに心をこらす少女の心のうちを思うにいとなつかしく今迄ただは只いとわしき者にのみ思ひし外国人の中にかかるやさしきもありけるよと心にくき事限りなし。屏風巖をめぐりてはんにや般若ほうとう方等二つの滝の見ゆる処に出ず。谷を隔てて稍遠く見たるなかなかに趣深く覚ゆ。ここより五十ばかりの人道づれとなりて行く。草履をはき下駄を手に提げたり。広島の人という。三人声かけあいて登るに道けわしければ汗は滝なして降る。薄暗きに

華嚴の滝をのぞきつ七時過中禪寺湖畔の旅籠屋に入る。

翌朝つとめて起き出ず。快晴。山深き暁あかつきのながめ、しんしんとし

て物一つ動かぬ静かさは膚はだにしみわたりて単衣ひとえに寒さを覚えたり。

日、湖の面を照す頃舟を雇うて出ず。二荒ふたらの裾山樹々の梢に鶯の

今をさかりと鳴く声いとめずらし。風はそよとも吹かず、日熱か  
らず、四方のけしきのどかに見わたさるるに

時じくに鶯鳴くも二荒のおくなる里は常春にして

舟、菖蒲が浜に着く。湯本道なり。舟を上れば竜頭の滝あり。し  
ばらく遊びて後戦場が原に出ず。いろいろの草花うつくしくおの  
がしし色に誇るが中に菖蒲の花なん殊ことに多かりける。

二荒の山の裾野にあかねさす紫匂ふ花あやめかも

櫻草の花によく似る紫の花めでつゝも名を知らずけり  
花あやめしみ咲きにほふ紫の花野を來れば物思もなし

紫の雲ゐる野べに朝遊び夕遊びます二荒の神

湯の滝を見、湯本に遊びて歸る。中禅寺の湖をながめて

天雲のいはひもとほる湖の上に眞白片帆の舟歸る見ゆ

歌袋歌満ちあふるなめ革のかはり袋のありこせぬかも

歌袋の歌は文して格堂にからかいやりしなり。此夜も山田屋に宿  
る。明日は華嚴の滝壺に下りんとて長塚も我もいさみきおう。先  
ず歌幸を祈らばやとて詠む。

二荒の山にまします女神だち歌のわく子にさちあらせたまへ

翌日朝早く案内者一人召し具し二人きおいにきおいて滝壺に下る。

岩崩れ足<sup>すべ</sup>にる。手に草をつかみてうしろ向きになりて少しずつ下り行く。危き橋をようように這いわたりて終<sup>つい</sup>に下り着くに滝のしぶき一面に雨の如く足もとより逆に吹きあぐるさますます恐ろしく暫<sup>しばら</sup>くもイみかねつ。僅<sup>わずか</sup>にかえり見れば小き円<sup>まろ</sup>きうつくしき虹の我身をめぐりて目の下に低く輝けるあり。我動くところに虹も亦<sup>また</sup>従いて動く。我は神となりたらん心地にてくすくとうとも覚ゆれど余りのすさまじさに得も留<sup>また</sup>まらで復もと来し岩を攀<sup>よ</sup>じて登り来る。衣は雨に濡れたらんが如し。茶店にて裸なりて乾す。ここに得たる長歌短歌若干別にあり。

昼<sup>すぎ</sup>過日光町へ下り霧降の滝見に行く。途中

あかねさす西日は照れどひぐらしの鳴き蟲山に雨かゝる見ゆ



ゆくゆく一人の少女のいと艶なるに逢う。長塚しきりに恋いかな  
しむ。我長塚に代りて

眞玉手にしぬ杖つきて霧降の山こえなづむ少女こひしも

滝を見て日光町の旅舎に帰る。宿の女又またのうねもごろにもてなす  
に我も心なきにしもあらず。

汗衣かわかしたゝむ君しあればかりねの宿とわがおもはなく

に

にじゅうさん

廿三日小山の停車場にて長塚たもとと袂わかを分つ。長塚は郷里岡田へ  
帰るなり。

二荒の神のたはりし歌玉の五百玉わけて君と別れん

上野停車場に着く。直じかに根岸庵おとなを訪いて華嚴の滝壺にて採りたる

葉広草、戦場が原の菖蒲の花など贈る。

夜深<sup>よふ</sup>けて家に帰る。

明治33年10月『日本』

署名

左千夫

# 青空文庫情報

底本：「左千夫全集 第二卷」岩波書店

1976（昭和51）年11月25日発行

底本の親本：「日本」日本新聞社

1900（明治33）年10月26日、27日

初出：「日本」日本新聞社

1900（明治33）年10月26日、27日

※「旧字、旧仮名で書かれた作品を、現代表記にあらためる際の作業指針」に基づいて、底本の表記をあらためました。

※読みにくい言葉、読み誤りやすい言葉には、振り仮名を付しま

した。底本は振り仮名が付されていません。

※初出時の表題は「瀧見の旅（上）（下）」です。

※初出時の署名は「左千夫」です。

入力：高瀬竜一

校正：岡村和彦

2018年8月28日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<https://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

# 滝見の旅

伊藤左千夫

2020年 7月13日 初版

## 奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail [info@aozora.gr.jp](mailto:info@aozora.gr.jp)

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>  
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。  
<http://tokimi.sylphid.jp/>